行政視察報告書

＊期　日　令和元年 10 月 2 日(水)～4 日(金)

＊調査地　大阪府茨木市

「シティプロモーション及びブランドメッセージ」

京都府亀岡市

「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」

茨城県古河市議会　総務常任委員会

＊関係資料については、議会事務局に保管してあります。

令和２年３月19日 報告

委員長	稲葉貴大
副委員長	小森谷博之
委員	秋庭　繁
委員	生沼　繁
委員	佐藤　泉
委員	園部増治

茨木市

● 人　口：282,030 人　（R1.8.31 現在）
● 世帯数：126,275 世帯（R1.8.31 現在）
● 面　積： 76.49ｋ㎡

茨木市は、淀川北の大阪府北部に位置し、北は京都府亀岡市、東は高槻市、南は摂津市、西は吹田市・箕面市・豊能町に接している。また、大阪市と京都市の間に位置し、大阪市のベッドタウンとしての性格を持っている。

日本でも有数の古墳群地帯で、古墳時代の初期から末期までの各古墳が現存している。昭和 23 年 1 月茨木町・三島村・春日村・玉櫛村の 1 町 3 村が合併して市制を施行、その後８か村を合併編入、平成 13 年 4 月に特例市に移行し、現在は府内 8 番目の人口を有する近代都市として、また北大阪の交通・産業の要衝として重要な位置を占め、めざましい発展を遂げている。

明治以降、三島郡の行政・経済・文化・教育の中心地で、豊かな稲作地であったが、大阪市の衛星都市として成長、商工業は、旧三島郡を経済圏として発達してきた。昭和 30 年代に入ると近代的大工場が進出し、幹線道路に接する一帯は、京阪神工業地帯の一角を形成、名神高速道路や大阪中央環状線などの広域幹線道路が交差する交通の要衝であり、倉庫業等の流通関連企業が進出した。市南部にある北大阪流通センターには、平成 29 年 10 月には松下町に大手運送業者の物流拠点、平成 30 年 10 月には大手オンラインストアの物流拠点が完成、更なる発展が期待されている。彩都（国際文化公園都市）のシンボルゾーンである西部地区の研究開発拠点ライフサイエンスパークでは研究開発施設の集積が進み、大阪北部地域におけるバイオクラスター形成の中核を担うエリアとして発展している。

【調査事項】　シティプロモーション及びブランドメッセージ

１．まち魅力発信課（課名・業務内容等）について
２．茨木シティプロモーション基本方針について
３．茨木市ブランドメッセージ（ロゴ）について
４．（市内外の）反応、成果等について
５．市内在住の若い世代をターゲットとした取り組み状況
６．今後の展開及び課題等ついて

【調査事項】シティプロモーション及びブランドメッセージ

１．まち魅力発信課（課名・業務内容等）について

平成 27 年 4 月の機構改革により広報広聴課から「まち魅力発信課」へ変更、広報係と魅力発信係の２つで主に情報の発信、魅力の発信、まちの魅力の発掘・編集、マスコミ対応業務を行っている。

なお、平成 30 年度には市民参加・市民参画・魅力の発信の 3 つのテーマをまとめた市制施行 70 周年記念事業で、全編茨木市ロケによる映画「葬式の名人」の撮影、図書館とのコラボによる BOOK TRAVEL（全長 5 ㎞の緑地帯に移動図書館や読み聞かせスペース等を設けて気軽に外で読書が楽しめる事業）を開催した。

２．基本方針について

平成 28 年 3 月策定の「茨木市シティプロモーション基本方針　明日への扉を開く ibarakey（鍵）」では、他市における定住促進に重点を置いた従来のシティプロモーションとは性質が異なり「市と市民、事業者・団体がともに、まちの魅力を市内外に効果的・戦略的に発信する」ことで、茨木の良さを認識・再認識し、「市内外の方が茨木をもっと好きになり、茨木との関わりをもっと増やし、茨木をもっと、ずっと元気にすること」を目的としている。

伝えたいターゲット（対象）に対して、茨木の魅力に“気づいてもらう”とともに、その発信に向けて“一緒に行動し、魅力を共創できる”ように市をはじめ市民、事業者・団体など関係者が一丸となって取り組む方向性を示すものである。

市内のターゲットは全市民であるが、重点ターゲットとして、魅力発信に関心が高く、近隣との交流が希薄な 20 歳代から 40 歳代、市外のターゲットはショッピングや飲食、レクリエーションなどに訪れやすく、施設の利用やイベント等に参加しやすい北接地域の近隣都市住民である。

３.ブランドメッセージ（ロゴ）について

茨木といえばこれ！というようにイメージが連想され、さらに「ブランド」にまで高めるためブランドメッセージを活用、まちのブランディングやまちのイメージ形成を図る。

日本人初ノーベル文学賞作家の名誉市民　川端康成、市内に 6 大学・11 高校

⇒『川端康成が学んだ教育のまち茨木』

ブランドメッセージ（ロゴ）

・茨木の「次」という文字。

「次々とひろがる、はてしない未来」といったイメージが込められている。

・地軸と同じ 23.4 度の傾きの黄色い斜めのストライプ。

地軸が四季折々の豊かな彩りを生み出すように、茨木市もこれから多彩で豊かなシーンを創造していくという想いが込められている。

・明るい黄色は、茨木市旗の紫紺色と補色関係（互いの色を最も際立たせる色）になっている。

４．（市内外の）反応、成果等について

インナープロモーション、郷土愛の醸成により、市民が市の魅力を伝えられるか、市に愛着を持ち自慢できるかが重要な鍵であり、イバスタグラムや大学との連携、ふるさと寄付金・魅力発見バスツアー、メディアへの露出などで魅力の共創に努めた。全編茨木市ロケによる映画製作のためのクラウドファンディング目標額 1,000 万円に対し、実績額 2,100 万円であったことは、市への熱い思いと期待の表れである。なお、人口は年々増加傾向にある。

５．市内在住の若い世代をターゲットとした取り組み状況

「茨木が好き！」「茨木の魅力を発信したい！」と市内外から集った 18 歳から 49 歳の市内在住・在勤・在学の人（高校生を除く）で魅力発信用フェイスブックページに記事を投稿できる 16 人（市内 14 名・市外 2 名）で構成される茨木まちみレポーターというＰＲチームを結成し活動している。

６．今後の展望及び課題等について

茨木市では多くの魅力や新しい魅力を創り出す動きが進められているが、都市のイメージや魅力が、市内外に十分に伝わっていないのが現状である。

そのため、ターゲットを絞り、市民を巻き込んだインナープロモーションに力を入れ、茨木をもっと好きになり、茨木との関わりをもっと増やし、茨木をもっと、ずっと元気にするための「茨木市のファンをふやす！」取り組みを積極的に行っていく。

亀岡市

- 人　口：88,814 人　（R1.6.1 現在）
- 世帯数：39,062 世帯（R1.6.1 現在）
- 面　積：224.80ｋ㎡

亀岡市は、京都府中西部に位置し、京都市や高槻市に隣接する京都府第 3 の都市で、京都市へは電車や車で約 20 分、大阪市へは約 1 時間と大変便利である。旧名は亀山。明治 2 年、三重県亀山市と混同するため亀岡へと改称された。明治 4 年廃藩置県で亀岡県となり、同年に京都府所属となった。古都・京都よりも歴史が古く、足利尊氏や明智光秀は丹波・亀岡の地から動き、日本の歴史を変えていった。

大都市に隣接しながらも、水田生態系が豊富に残り、アユモドキ（国天然記念物）やオオサンショウウオ（特別天然記念物）などが観察されており、豊かな自然が育んだきれいな地下水を水源とする水道水は、厚生省の「おいしい水研究会」で「おいしい水道水」に選ばれている。この豊かな自然景観や市民の生活環境を守るため、2018 年 12 月 13 日に市と市議会は共同で「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」を行った。

市総面積の約 12.3％にあたる 2,770ha の耕地を有し、うち田耕地が 2,660ha で約 96.0％を占める。平成 28 年キヌヒカリで亀岡を含む丹波地区が特Ａを獲得した。各集落には営農組織では地域の特性を生かした産地づくり対策が進められ、 丹波松茸、丹波黒豆、馬路大納言小豆、丹波栗、みず菜、千枚漬に重宝される篠大根（かぶら）、丹波山の芋等の京野菜、亀岡牛、丹波地鶏、鮎、猪などが知られている。また、日本で唯一ハバネロ（トウガラシの一種）の商業水準の生産も行われている。

【調査事項】　かめおかプラスチックごみゼロ宣言

１．宣言の経緯及び概要について
２．具体的な取り組み事例について
　（事業所、市役所、市民等）
３．市民や民間企業の反応及び成果等について
４．今後の課題と展望について

【調査事項】かめおかプラスチックごみゼロ宣言

1. 宣言の経緯及び概要について

2005 年　保津川下りの船頭 2 人による清掃活動スタート
2007 年　保津川の環境保全に取り組む「ＮＰＯプロジェクト保津川」誕生
2012 年 『第 10 回 海ごみサミット 2012 亀岡保津川会議』開催（内陸部初）
2013 年 「川と海つながり共創プロジェクト」設立（15 自治体）
2015 年　桂川市長　環境先進都市を目指す
2018 年 「亀岡市ゼロエミッション計画」策定
2018 年 12 月 13 日『かめおかプラスチックごみゼロ宣言』(市・議会共同声明)

プラスチックごみ問題が、保津川をはじめとする自然環境や市民の生活環境、そして観光にも大きな影響を与えているため、私たち一人ひとりの身近な問題として捉えていく必要がある。私たちにできる身近な取り組みを国内外の他都市とも連携し、さらに深化させ、2030 年までにプラスチックごみゼロのまちを目指す。そして自然環境の保全と地域経済の活性化に一体的に取り組む「世界に誇れる環境先進都市」を実現する。

2. 具体的な取り組み事例について

・マイバック 100％ 目指そうプロジェクト（レジ袋の無償提供禁止）

2019 年 4 月　自治会、観光・商業関連事業者、大学、金融機関、行政等の 34 企業･団体による「世界に誇れる環境先進都市かめおか協議会」の設立
2019 年 5 月　市内の主要スーパー7 社と「亀岡市におけるエコバッグ等の持参及びレジ袋の大幅削減の取り組みに関する協定」を締結
8 月 20 日からレジ袋の有料化スタート（基準額　50 号サイズ　1 枚 3～5 円）
『KAMEOKA FLY BAG Project』 ⇒ 廃棄パラシュート生地のエコバッグでＰＲ

・リバーフレンドリーレストランプロジェクト

プロジェクトに賛同し、以下①～⑥の認定基準を満たす市内飲食店を「river friendly restaurants」に認定、プラごみ削減に向けた市民レベルの流れを創造

① 発泡ポリスチレンフォームを一切使用せず、持ち帰り用容器は再利用可能なものを使用
② 皿、スプーン、フォーク等の食器類はすべて再利用可能なものを利用
③ レストラン全体で再利用活動を徹底
④ プラスチック製のストロー、テイクアウト用リサイクルバック等は求められた場合のみ提供

⑤ ペットボトル入りのドリンク類は販売しない
⑥ プラごみ削減を実践する市民には、特典を付与

・いつでも、どこでも「亀岡のおいしい水」プロジェクト

ボトルディスペンサー式給水機を連携した市内店舗に設置し、亀岡のおいしい“給水スポット”として活用、いつでも、どこでもおいしい水が飲める拠点づくりを進める。また、サイクリングやランニング中に立ち寄れるようにＰＲするなどスポーツ観光関連事業とのコラボも検討中

3. 市民や民間企業の反応及び成果等について

現時点でのエコバック持参率は 70～80％といったところである。

市民は、市外での買い物にもエコバック等を持参している。

民間企業については、スーパーは以前からエコバスケットやポイント還元を行っていたが、コンビニは商品の関係でレジ袋廃止は難しいため、理解を得られるよう啓発等を行っている。その他、多くの事業者（店舗）が紙袋・紙ストローへの切り替え、エコバッグ配布・販売など、プラスチックごみゼロに向けたオリジナルアクションに積極的に取り組んでいる。

また、一例として、布に蜜蝋を塗り繰り返し利用できる環境配慮製品生産者の亀岡市への移住もあった。

4. 今後の課題と展望について

まずは、レジ袋の有料化の開始を受け、2020 年「プラスチック製レジ袋禁止条例」の制定・施行、2030 年までにプラスチックごみゼロのまちを目指す。

また、『世界に誇れる環境先進都市かめおか』実現のため、亀岡ブランド力の確立・発信（企業誘致、移住定住、交流人口の増加）、シビックプライド〈当事者意識を伴う自負心〉の創出（まちづくりへの参加、地産地消の促進）に向け、環境を軸とした持続可能な開発目標ＳＤＧｓの考え方に基づき、各種事業に市民や民間企業とともに取り組んでいく。

【視察後記】

総務常任委員会では、大阪府茨木市と京都府亀岡市の両市を訪問した。

今後急速な進展が見込まれる人口減少や少子高齢化による社会問題を背景とした都市間競争を勝ち抜くため、シティプロモーションを推進する自治体は多い。

茨木市では、「シティプロモーション及びブランドメッセージ（ロゴ）」について話を伺った。

平成 27 年度にインパクトのある『まち魅力発信課』を発足、「茨木市シティプロモーション基本方針」に基づき積極的な市の魅力発信に力を入れている。市政施行 70 周年（平成 30 年度）には、市民参加・市民参画・魅力の発信をテーマにし、オール茨木市ロケの映画や市のイメージムービー作成、魅力発信冊子の発行、図書館とのコラボ事業など大々的なプロモーション活動を行った。

本市においても昨年 4 月から『シティプロモーション課』を新設したが、まだまだ課題も多く、大きな成果が得られていない。まずは古河市民がシビックプライドを持ち、まちの魅力の創造やブランド力の向上を図り、市内外へ情報発信・ＰＲする。その結果、市外からの移住・定住人口の増加、企業・大型店舗の進出等につなげていくことが、やはり重要であると考える。

今後、シティプロモーションを積極的に行っていくにあたり、茨木市の取り組みは大変参考となるものであった。

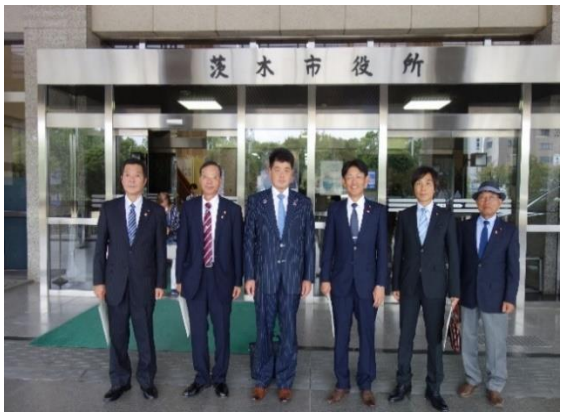
海洋汚染や生態系への悪影響を引き起こす海洋プラスチックごみ問題は、大阪で開催されたＧ20 首脳会議においても取り上げられるなど、世界での関心が高まっている。最近では、ウミガメの体内からも多くのマイクロプラスチックが発見されたという調査結果が話題となった。

亀岡市では、「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」について話を伺った。

2005 年に保津川下りの船頭 2 人でスタートした清掃活動は、2012 年「第 10 回海ごみサミット 2012 亀岡保津川会議」などを経て、2018 年 12 月「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」（市と議会の共同声明）により 2030 年までにプラスチックごみゼロを目指し、自然環境の保全と地域経済の活性化に一体的に取り組む「世界に誇れる環境先進都市」を実現することとなった。その成果の 1 つとして、レジ袋有料化（無償提供禁止）により、市民一人ひとりがマイバッグやマイボトルを持ち歩くよう心掛け、現時点でのエコバッグ持参率は約 80％となっている。2020 年には「プラスチック製レジ袋禁止条例」の制定・施行を目指すが、コンビニなど民間企業の理解・同意が得られるかが大きなカギであると考える。

本市においても、環境政策等におけるペットボトルやレジ袋、食品トレーやストローなどの削減・廃止、リサイクルは環境保全の重要な課題であり、亀岡市の取り組みは大変参考となるものであった。

【茨木市での研修風景】



【亀岡市での研修風景】